

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：宗田 市太郎 幹事：平尾 信明

情報委員長：清水 忠

1977・3月17日

第86号

日本の庭、ヨーロッパの庭

造園家 岩谷 浩三氏



ヨーロッパの名園として有名なパリのヴェルサイユ宮殿や、スペインのアルハンブラ宮殿の前庭を観て、日本人は美しいと思う。

しかし同時に、「その美しさは決して自然のものではない。四角な池や噴水、椀のように整然と刈り込んだ樹木、そして其等のシンメトリカルな配置は、造り物の人工の極致ではないか。それに引きかえ、日本の庭こそ正しく自然そのものである」という思いが誰の胸にも去来する筈である。

ところが逆に外国人は、日本の庭を観てこう評している。

「日本人は全く片輪好みだ。」

折角真直に伸びるべき樹木に、針金を巻いたり、綱を引っ掛けたりして無残にゆがめているではないか。又、実に奇怪な恰好の石ばかり集めて喜んでいてではないか。何という不自然な庭園好みだ」と。

この彼我の意見の対立に、ヨーロッパと日本の風土の基本的差異がはっきりと感じられて極めて興味深いものがある。

我々日本人は、自然というものを厳しい風雪の中でゆがんだもの、不規則で捕えどころのない条件によって変化するものと考えるのに対してヨーロッパ人は自然を規則正しいもの、整然たる秩序を持つもの、人間の理性によって其の変化を合理的に調節できるものと認識する。

そこからヨーロッパ人の自然征服、日本人の自然との同和という形而上的な命題が生れて来る訳であるが、そういったむずかしい論議には深入りしないでおこう。

唯私は、最近コンクリートで囲まれた閉鎖的な家に住居してみて、つくづく日本の庭への郷愁が高まるのを禁じ得ないことだけ触れておこう。

縁側の納戸を開け放つと、軒下から飛び石が連らなり、歩を移すに従って、或は緩やかに或は急に、千変万化の景観が展開する日本の庭、そこには河といわれようとも、人間と自然の巧まざる対話を実現する。日本人だけが持つすぐれた美意識の世界があると私は信じている。

—金沢北RC例会卓話より— (文責 清水 忠)

ロータリアンの茶の間から

“薬業一筋40年……私は薬屋のボンサン” です

小林 隆二 君



“寒骨に徹せずんば梅花綻びず”と、長い豪雪にやっと春の陽ざしが見え始めた今日此頃梅の蕾も少しふくらむ日、笠間会員と二人で会社（中栄草栄堂）をお訪ねしました。何時も会社の前を通る度に稲荷堂を祠り、周りの花壇には季節の花、つつじ、チュリップが咲き、たくさんの営業車が美しく並び、きびきびした社員の動作を見ながら、どことなく、無駄がなく、合理的でそれでいて家族的な楽しい雰囲気を感じていました。それが今日会社を訪ねて始めて、社長小林会員の人柄そのままの表徴である事を知りました。それは、誠実と質実、深い愛情と思いやり、これが、社員一団となって会社の姿の様に思われたのです。

会社の事務室のドアを開けて驚いた事に、大きな部屋に（柱一本もなく）机がずらりと並び、社員の方がそれぞれ忙しそうに立働いている中に、同じ小さい机が、書類を山と積み並んでいました。それが社長の席であります。如何にもこれでは一目で社員全体の動きが解り、今日は誰その顔色が悪い等と……判断も出来家族的な愛情と厳さが表われています。“私はあくまで薬屋のボンサン”と自負し40年を貫く大阪商人の心意気を感じられます。月給袋を見せて戴くと、表に大きく、“お客様に役立ち、お客様と共に栄える”と書いて有りました。

この心が社員一同今日の中栄草栄堂を築き、隆盛に導いていられるのだと感心致しました。“相手の心になって考える”自分先手の今日の物の考え方の中で小林さんは立派にロータリー精神を実践されてきました。

小林会員は朝鮮で生れ、幼くして父に死別し、神戸で育ち、武田薬品に入社、それから満洲に渡り2年、その後シベリヤに抑留3年、多くの苦難を乗り越え、昭和23年再び武田に戻り薬業一筋に來られました。昭和41年現在の中栄草栄堂に赴任され、近江町より7年前神宮寺3丁目に移転、社員も3倍、業績も高め、今日の立派な会社に興隆されました。

近所の関係で何時も例会には便乗させて戴き親しく色々お話を聞かせて戴きますが、先日も、“この日曜には医王山に乗って来ました”と、こともなげに言われて、“この大雪に”……と驚いて問ねました。前々からあちこち登山される事は知っていましたが、唯一人で雪山をカンジキを履いてまで登山とはこれは私などの様に、季節の良い、さも天気ばかりを選んで登る山遊びと異って、本ものの登山であり、あの不撓不屈のファイトはこうした中に生れたのだと感じました。毎朝きちんと駅前から徒歩で（約20分）8時15分前には会社に出て勤務される。アパートは一人住いでさぞ御不自由でしょうと思ったが問わないことにしました。10年間も続けて來られたのにと私は思ったからです。御家族は大阪の堺市に住まれ、奥さんと男子2人の息子さんはもう成人と大学生に立派に成長されています。

帰りに、整然とした広い倉庫を案内していただき、薬の如何に多いことか、又我々日常に欠くべからざるかをつくづくお教えられお別れしました。

外はまたしても弥生の空に小雪がちらついていました。

（吉山宥海記）

“さようなら メアリー”

『みなさまさいごに、しあわせな1ねんかんでした。たいへんお世話になりました。ありがとうございました……………』

涙ながらにやっと言えた、この短い言葉の中には、彼女の語り尽くすことの出来ない1年間の感謝と思いがこめられていたに違いない。

昨年春、期待に胸ふくらませ来日した彼女、しかし、言葉と生活様式も全く違うここでの1年



間は彼女にとって決してやさしい日々ばかりではなかった筈である。特にホームステイをして下さった、浅田・越野・山田・小杉(善)会員とその家族の方との3ヵ月間ずつの生活の中には様々な涙と笑いのドラマが演じられたのであろう。今日のメアリーの成長した姿の中にその努力と愛情が滲み出ている。

みなさんの話では、彼女は陽気でユーモアがあって、アメリカらし大らかさ、合理性を持ち合わせている反面、なかなか強情な女の子だったようである。が、「一諸に生活して得る

ものが多くあった。」「メアリーを通してアメリカを見ることが出来た。」「自分の子ども以上に可愛いかった。」と口々に言われるのはやはり彼女の人一倍の努力と懸命に学ぼうとする姿勢であったと思う。

ともあれ受け入れ会員と全ての会員の方々の協力によって日本人とアメリカ人の間に“メアリー・バーンズ”という美しいかけ橋が見事に立派にかけられたのである。

(事務局野村記)

ロータリーニュース

社会奉仕委員会炉辺会合より

社会奉仕委員会のファイアサイド・ミーティングが3月3日夜6時から小杉善二会員宅において行われました。当日出席下さったのは、宗田・岡田小杉・若野・高田・清水・松本及び交換学生のメアリー君の八名。

特に議題はありませんでしたが、メアリー君の帰国が間近に迫ったことでもあり、彼女を囲んでの懇談会という形式がとられました。

彼女の日本語が、わずか一年間で予想以上に上達したことや、日本のマナーの修得が大変上手で、日本の環境によくなじんで居られることは、彼女

の若くて素直な人柄によるところが大きいと思われれます。

こうした若い交換学生の受け入れを今後積極的に積み重ねてゆくことは、それが単なる学問的留学ではなく、日常の体験的なものを重んじる留学だけに、うまくすれば、異民族間の国際理解の増進には極めて効果的であると思われれます。

当夜はこのほか、戦後ソ連における抑留中の秘話や、白と黒の人種偏見と南北問題、或は金沢大学の移転についての要望など、ひろく諸般の情勢に言及したもので、楽しい会合であったと思います。

尚、ホスト役の小杉委員長には、ご家族ともども遅くまで何かとご配慮を頂き、出席者一同、厚く御礼申し上げる次第です。

(松本智記)

